

古代日本語における動詞接続トリーの様相

阿部^{あべ}裕^{ひろし}(名古屋大学大学院生)

1. はじめに

古代(上代～中古)日本語における動詞接続¹に関しては、複合動詞の成立時期や前項後項間の結合度の強弱など、問題が多い。これらの解決には、古代語における個々の動詞接続についての記述の蓄積が必須である。本発表では動詞トル(取)を前項とする動詞接続トリーの中古における様相を報告し、上代と比較することによって、古代語における複合動詞のあり方の一端を明らかにすることを目指す。

拙稿(2011)では、前項後項が別個に動詞として機能する動詞接続を「非一体化動詞接続」、前項後項が複合して一つの動詞として機能する動詞接続を「複合動詞」と呼んだ。古代語の動詞接続は前項後項の緊密度が弱く、非一体化動詞接続が多いとされる。しかし古代語においても、意味的に前項と後項の単純合成ではないことが明らかな動詞接続や、形態的に一方の要素が接辞である動詞接続²は、複合動詞と認められる。なお、本発表では動詞接続が複合動詞として辞書に登録されることを「語彙化」、また特に、複合動詞の意味機能が構成要素から著しく離れること(意味の不透明化)を「熟合化」と呼ぶ。

拙稿(2011)では上代語のトリーについて考察し、熟合化している「トリ持つ」や、前項が接頭辞であるトリーが存在したことを明らかにした。

(1)上代語トリーの特徴

a. 前項と後項が一体化していない非一体化動詞接続が存在する。

月夜見の 持てるをち水 いトリ来て(伊取来而) 君に奉りて をち得てしかも (万葉集・巻 13・3245)

b. 熟合化した「政事を行う」意の「トリ持つ」が存在する。

大君の 任きのまにまに トリ持ちて(等里毛知氏) 仕ふる国の (万葉集・巻 18・4116)

c. 目的語ヲ格と動作の場所を表すニ格を伴う例が顕著に多い。

木綿たすき 肩にトリ懸け(肩尔取挂) 倭文幣を 手にトリ持ちて(手尔取持氏) (万葉集・巻 19・4236)

d. 前項が接頭辞と考えられるトリーが存在する。

唐衣裾にトリ付き(須宗尔等里都伎)泣く子らを置きてぞ来のや母なしにして
(万葉集・巻 20・4401・他田舎人大嶋・防人歌)

e. 上代のトリーには非一体化動詞接続と複合動詞が混在している。

トリーの種類数(異なり語数)は、(2)に示すように中古になると大幅に増加する。

(2)トリーの異なり語数

a. 上代：31 種(記紀歌謡、万葉集、続日本紀宣命)

b. 中古：138 種(『平安時代複合動詞索引』³)

¹ 「動詞接続」を「動詞連用形+動詞」形態の総称とする。本発表の「非一体化動詞接続」を「動詞接続」と規定した百留(2003)とは定義を異にする。

² 語基に接辞がついて成立したものは本来「派生動詞」とすべきだが、本発表では複合動詞に含めた。

³ 東辻保和ほか編、清文堂。なお、同索引では二連の動詞接続と三連の動詞接続(「トリ上ぐ」と「トリ上げ混ず」等)を

数字上は上代から中古にかけてトリーが大きく発展したように見える。トリーには前項が接頭辞であるものが存在することから、中古には接頭辞トリーによる造語が盛んに行われ、それがトリーの増加の要因になっている可能性がある。しかし、(1d)で見たように接頭辞を前項とするトリーは上代から存在するため、接頭辞による造語だけでは中古における劇的な増加は説明できない。本発表では、この増加にはテクストの性質が関連しており、実際には上代からトリーが多く存在したと推測されることを主張する。

2. 中古のトリー

中古のトリーには、上代と共通するものと、中古になって新たに確認できるものが存在する。前者が13種、後者が125種であり、中古に新出するものが圧倒的である。これらのトリーには、1作品でのみ使用されるものと、多くの作品で使用されるものが混在している。

内省の通じない古代語では、ある動詞接続が複合動詞か非一体化動詞接続かを判定することが容易でない。意味的特徴あるいは形態的特徴から前項と後項が複合していることが明白な例もあるが、判断が難しい例も多い。そこで本発表では、動詞接続が使用される作品の数も判断の基準に加える。使用される作品数の多寡は、そのトリーの社会的な定着度を示すものと考えられる。複数の作品に使用されるトリーはある程度社会的に定着していたと見なすことができよう。具体例を確認する必要はあるが、定着していたトリーは語彙化した複合動詞であった可能性が高い。

2.1 上代と中古に共通するトリー

上代と中古に共通するトリーは、「トリ上ぐ」「トリ置く」「トリ懸く」「トリ替ふ」「トリ着る」「トリ垂づ」「トリ添ふ」「トリ付く(四段活用)」「トリ付く(下二段活用)」「トリ尽くす」「トリ続く」「トリ持つ」「トリ装ふ」の13種である。このうち、9種類は中古に3作品以上で使用される。

(3)中古に使用される作品数

- a. 1~2作品：トリ着る、トリ垂づ、トリ付く(下二段活用)、トリ尽くす
- b. 3作品以上：トリ上ぐ、トリ置く、トリ懸く、トリ替ふ、トリ添ふ、トリ付く(四段活用)、トリ続く、トリ持つ、トリ装ふ

まず注目されるのは「トリ持つ」である。「トリ持つ」は本来的には(1c)に挙げたような「手にする」意を表していたが、(1b)で挙げた「政事を行う」意の熟合化した用法が上代から存在した。熟合化した「トリ持つ」は、中古にも引き続き見られる。

(4)中古の「トリ持つ」

- a. 神人の手にトリ持たる榊葉に木綿かけそふる深き夜の詩も (源氏物語・若菜下)
- b. 宰相の君は、ましてよろづをトリ持ちて、あはれに営み仕うまつり給ふ。 (源氏物語・藤裏葉)
- c. 宮もあやにくにトリ持ちて責め給しかば、 (源氏物語・総角)

別個に掲載しているが、本発表ではこれらを一種として数えた。

(4a)は「手にする」意、(4bc)は熟合化した用法である。(4b)は「取り仕切る」と解釈されるが、(4c)は目的語が存在せず解釈が容易でない。上代には政事に関する例のみ見られたが、中古は用法がやや広いようである。熟合化した「トリ持つ」は源氏物語、浜松中納言物語、今鏡に確認でき、中世の増鏡にも用例があることから、複合動詞として定着していたことは明らかである。非熟合的な「手にする」意の用法と熟合化した用法が混在する点は、上代と中古に大きな差はない。

「トリ持つ」だけでなく、「トリ上ぐ」「トリ替ふ」「トリ付く(四段)」等も中古において上代と用法を変えずに使用される。

(5)「トリ上ぐ」

- a. 針袋トリ上げ前に置き(等利安宜麻敞尔於吉)返さへばおのともおのや裏も継ぎたり
(万葉集・巻18・4129・大伴池主)
- b. 蓮の浮葉のいとちいさきを、池よりトリ上げたる。
(枕草子・144段)

(6)「トリ替ふ」

- a. 色着せる 菅笠小笠 我がうなげる 玉の七つ緒 トリ替へも(取替毛) 申さむものを
(万葉集・巻16・3875)
- b. 扇ばかりをしるしにトリ替へて出で給ひぬ。
(源氏物語・花宴)

(7)「トリ付く」

- a. 唐衣裾にトリ付き(須宗尔等里都伎)泣く子らを置きてぞ来のや母なしにして
(万葉集・巻20・4401・他田舎人大嶋・防人歌)
- b. 男木ノ枝ニトリ付テ流下テ呼テ云ク、
(今昔物語集・巻5・第18)
- c. 御ものゝけのトリ付き奉りにければ、
(栄花物語・巻26 楚王のゆめ)

(5ab)は「持ち上げる」、(6ab)は「交換する」、(7ab)は「しがみつく」意であり、上代と中古で差は認められない。(5a)(6a)は上代の例のみでは複合動詞か非一体化動詞接続かの判断が困難であったが、上代にも「トリ持つ」等複合動詞であるトリーが存在すること、同じ形態が中古に安定して使用されていること、意味変化が見られないことから、上代の時点で語彙化した複合動詞となっており、それが中古にも引き継がれた可能性が高いと思われる。(7a)「トリ付く」は上代でも複合動詞と認められた例である⁴。中古には、(7c)のような物の怪が「憑りつく」意も出現するが、基本的な意味に変化はない。

以上、上代に成立していた複合動詞としてのトリーが中古にも引き継がれており、用法に目立った変化がないことを確認した。ただ、上代において語彙化していた可能性があるトリーにも中古に残らないものがある(「トリ見る」等⁵)ため、上代と中古の連続性については今後も考察していく必要がある。

⁴ 「トリ付く」には目的語が存在しない。単独のトルは必ず目的語を有するため、「トリ付く」の前項トリと動詞トルは特徴を異にする。また、全体の項構造が後項である「付く」の単独用法に一致する。以上から、「トリ付く」の前項トリは接頭辞であり、「トリ付く」全体で一語の複合動詞であると考えられる。

⁵ 「トリ見る」は「看病する」と解釈される。上代には複数確認できるが、中古以降はほぼ姿を消す。ただし、類聚名義抄観智院本の[言尔]字の訓に「トリミル」がある。

国にあらば 父トリ見まし(父刀利美麻之) 家にあらば 母トリ見まし(母刀利美麻志)世間は かくのみならし 犬じもの 道に伏してや 命過ぎなむ
(万葉集・巻5・0886・山上憶良)

2.2 中古に出現するトリー

中古のトリーの大部分(138 種中 125 種)は上代に確認できない。使用される作品数から 3 種類に分け、その一部の例を以下に示す。

(8)中古に出現するトリー (一部)

- a. 1 作品(57 種)：トリ当たる、トリ過つ、トリ奪ふ、トリ覆ふ、トリ聞こゆ、トリ組む、トリ背く、トリ残す、トリ開く、トリ設く、トリ紛らはす、トリ養ふ、トリ緩む
- b. 2~4 作品(34 種)：トリ扱ふ、トリ争ふ、トリ動かす、トリ落とす、トリ加ふ、トリ殺す、トリ直す、トリ広ぐ、トリ混ず、トリ納む
- c. 5 作品以上(34 種)：トリ集む、トリ入る、トリ行ふ、トリ返す、トリ認む、トリ繕ふ、トリなす、トリ外す、トリ遣る、トリ分く

複数作品に確認されるものが多いことから、中古に新たに出現するトリーの多くが、上代と共通するトリーと同様、定着していたと考えられる。

このうち、「トリなす」は熟合化していたと考えられる。源氏物語において、単独の「なす」は(9a)のように「~を~の状態にする」「~を~に変える」といった意味を表す。これに対し、「トリなす」は「取り沙汰する」「解釈する」「勘繰る」と解釈されるような「本来そうでないものをそのように扱う」意を中心とする。文法的にも、「なす」は対象を表すヲ格と変化結果を表すニ／ト格をほぼ必ず伴うが、「トリなす」にはその傾向がない。

(9)「トリなす」

- a. いままでこの君を御子にもなさせ給はざりけるを (源氏物語・桐壺)
- b. 心浅くもトリなし給哉。 (源氏物語・葵)
- c. 作りごとめきてトリなす人ものし給ければなん。 (源氏物語・夕顔)

構成要素(特に後項「なす」)の意味が僅かに残っていると見られる例もあるが、中古の「トリなす」はトルとも「なす」とも異なる独特の用法を獲得しているといえる。「トリなす」の形成過程としては、トルと「なす」がいずれも動詞としての機能を残した状態での結合(「語基+語基」の複合)と、語基としての「なす」に接頭辞トリが付されることによる結合(「接頭辞+語基」の派生)が考えられるが、どちらのプロセスであったとしても、結合が起きた直後には「トリなす」の特殊な意味は生じないと思われる⁶。意味の熟合化は、「トリなす」という形態が成立し、慣用的に使用される間に起きるものであろう。よって、「トリなす」は複合動詞として成立してからある程度長い時間を経ていると推測される。

中古には前項が接頭辞と考えられるトリーが多い点も注目される。「トリ集む」は、(10a)では実質的な「手紙を集める」動作を表すが、(10bc)は表す動作が明確でない。これらは「何もかもそろって」「あれこれ集めて」等と解釈されるが、副詞的に「めでたし」「あはれなり」を修飾していると解することも可

⁶ 「なす」には、「住みなす」「言いなす」等の「意識して~する」意の補助動詞的な用法もある。この用法との関連も考慮する必要がある。

能である⁷。このような副詞的用法は単独の「集む」には見られない。

(10) 「トリ集む」

- a. この御文をトリ集めてたまはせたりしかば、(源氏物語・橋姫)
- b. 宰相の中將、をさ\／けはひをとらずよそほしくて、かたちなどたゞいまのいみじき盛りにねびゆきて、トリ集めめでたき人の御ありさまなり。(源氏物語・藤裏葉)
- c. 駅は、梨原。望月の駅。山は駅は、あはれなりしことを聞きをきたりしに、又もあはれなることありしかば、猶トリ集めてあはれなり。(枕草子・駅は)

「トリ集む」の類似形式に「カキ集む」がある。「トリ集む」と同様、「集む」には見られない実際に何らかの物体を集める動作ではない例が存在する。

(11) 「カキ集む」

御覧じはじめし年月のことさへカキ集め、よろづにおぼしつゞけられて、(源氏物語・桐壺)

これらの前項トリ、カキは接頭辞とされる(関 1993)。関(1993)は源氏物語の「トリ集む」を「その中のよいものを選んで集める」意、「カキ集む」を「一切合財を集める」意とする。この他にも、動詞に接頭辞トリが付された場合と接頭辞カキが付された場合の意味の違いを認めるが(「トリ乱る／カキ乱る」等)、これらに意味的な違いが存するという事は、それぞれが語彙化し、別語として定着していたことを示すのではないだろうか。中古には接頭辞的前項を有する複合動詞が数多く定着していたと考えられる。

この他にも、「トリ行ふ」「トリ重ね」「トリ分く」「トリ寄す」「トリ立つ」等、中古に頻用されるが上代に用例の見えない「トリー」は多い。意味の特殊化は顕著ではないが、いずれも複合動詞と思われる。

(12) 「トリ行ふ」「トリ重ね」「トリ分く」「トリ寄す」「トリ立つ」

- a. 殿は御服疾う脱がせたまひて、御襖など、事どもトリ行はせたまふ。(栄花物語・巻九)
- b. 秋のころほひなれば、もののあはれトリ重ねたる心ちして、(源氏物語・松風)
- c. 少將の君をトリ分きて召し寄す。(源氏物語・夕霧)
- d. 御果物・御臺など手づからトリ寄せつゝ、(夜の寝覚・巻二)
- e. 春宮の御母女御のみぞ、トリ立てて時めき給ふ事もなく、(源氏物語・濡標)

このように、中古に新しく確認されるトリーには語彙化し複合動詞として社会的に定着していたと考えられるものが多い。その理由として、中古になってトリーが多く誕生し語彙化した、これらのトリーは上代にも存在したが文献に残らなかった、という二つの可能性が考えられる。しかし、トリーの語彙化が中古になって急速に進んだとすれば、その理由の説明が難しい。ここで注目したいのは、上代のテキストが韻文、中古のテキストが散文を中心とすることである。テキストによって、トリーの出現に差が生じることは有り得るのだろうか。

⁷ 小学館古語大辞典は「とりあつむ」に「ひどく。極度に。」といった副詞的な意味を認める。

3. テキストによる相違

中古に138種出現するトリーのうち、散文には約130種が出現するが、八代集には15種22例しか出現しない⁸。この事実から、韻文にはトリーが出現しにくいという仮説が成り立つ。以下これを検証する。

八代集に出現する22例のうち、5例は「取ることができない」意の「トリあへず」である。後項「あふ」が補助動詞的に機能するトリーであり、他の語彙化したトリーとは構造が異なる。また「摘み終えることができない」意の「トリも果てず」も1例含まれるが、これは非一体化動詞接続と考えられる。これらを除けば、八代集のトリーは「トリ入る」「トリ懸く」「トリ飼ふ」「トリ返す」「トリすぶ」「トリ添ふ」「トリつなぐ」「トリつむ」「トリとむ」「トリ持つ」「トリ分く」の16例となる。

この16例には、(1c)で見た上代に多いヲ格とニ格を伴う構文が4例含まれる。これを仮に「～ヲ～ニトリー」構文と称する。同構文は、(13a)のように物語中の和歌にもしばしば出現する。

(13)中古の「～ヲ～ニトリー」構文

- a. やひらでを手にトリ持ちてさよ深く我おりてくる榊葉の枝 (宇津保物語・さがのみん)
- b. わが齡君が八千世にトリ添へて留めをきては思いでにせよ (古今集・346番)
- c. みしまゆふ肩にトリ懸け神南備の山のさか木をかざしにぞする (千載集・1286番)

上代から見られる「～ヲ～ニトリー」構文の特徴として、神事、祈願、武装といった特定の文脈の歌に多いことが挙げられる。同構文で使用される「トリ持つ」「トリ懸く」「トリ添ふ」等が同様の文脈でニ格を伴わずに使用される場合もあることから、上述した文脈の歌にはトリーが使用されやすく、そのようなトリーは「～ヲ～ニトリー」構文をとりやすいといえる。

上記16例から、「～ヲ～ニトリー」構文の4例とこれに類する文脈の2例を除けば、八代集のトリーは9種10例となる。9種のうち、「トリとむ」「トリつむ」「トリつなぐ」「トリすぶ」「トリ飼ふ」はいずれも散文での使用が0～2例に過ぎず、頻用されたものではない。従って、八代集に見られるトリーのうち、散文にも多用されたものは、「トリ分く」「トリ返す」「トリ入る」の3種のみということになる。

以上から、中古の和歌には散文に現れるような語彙化したトリーは現れにくいと分かる。和歌よりも和文の方が日常語彙に近いと、中古の和歌には当時使用されていたトリーの一部しか使用されなかったと判断できる。

万葉集や記紀歌謡といった韻文が中心テキストとなる上代においても、中古と同様にトリーの出現が抑制されていた可能性がある。(1c)で見たように、上代語にはこの「～ヲ～ニトリー」構文が多い。万葉集に見られるトリー91例のうち36例がこれに該当する。

(14)上代の「～ヲ～ニトリー」構文

- a. 世間は かくのみならし ますらをの 心振り起し 劍太刀 腰にトリ佩き(腰尔取佩) 梓弓 鞞トリ負ひ
て(鞞取負而) 天地と いや遠長に (万葉集・巻3・0478・大伴家持)
- b. 木綿たすき 肩にトリ懸け(肩尔取挂) 倭文幣を 手にトリ持ちて(手尔取持氏) な放けそと 我れは祈
れど 枕きて寝し 妹が手本は 雲にたなびく (万葉集・巻19・4236)

⁸ 八代集は中古から中世初期にかけての八つの勅撰和歌集(古今集、後撰集、拾遺集、後拾遺集、金葉集、詞花集、千載集、新古今集)を指す。用例の検索は『八代集総索引 和歌自立語編』(ひめまつ会編、大学堂書店)に拠ったが、同索引で「とりかはす」とされる新古今集1883番歌の例は通説に従い「とりかざす」として扱った。

この構文では「手にトリ持つ」が最多である。万葉集の「トリ持つ」は28例中16例で「手に」を伴うが、動詞トルが単独で「手に」を伴うことが93例中5例と少ないこと、「持つ」が「手に」を伴う例が確認できないことから、「手に」を伴いやすいことはトルや「持つ」にはない動詞接続「トリ持つ」の特徴といえる。

「トリ佩く」「トリ懸く」等も(14)に挙げたように「～ヲ～ニトリー」構文で使用される。動詞トルが「手に」以外の二格を伴う例(腰にトル/肩にトル)が無いこと、「腰に/肩に」がトリではなく後項「佩き/懸け」と格関係にあることから、前項トリは動詞として機能せず、接頭辞として後項に付属していると判断できる。

この「～ヲ～ニトリー」構文は、同構文で最も多用された「トリ持つ」から拡大したと考えられる。トルと「持つ」には動作の類似性・連続性があり、「～をトリ、持つ」と連続して使用されることにも合理性がある。また、「トリ持つ」には《「トル」という動作の結果「持つ」状態に至る》という関係が認められ、これは石井(2007)が動詞接頭辞化の元になる構造とした《過程結果構造》⁹に合致する。「トリ持つ」は前項トリの接頭辞化が起きやすい環境であったといえる。「手に」を伴いやすい「トリ持つ」において前項トリの接頭辞化が起き、類推によって「佩く」「添ふ」等にトリが付され、「腰にトリ佩く」「倭文にトリ添ふ」等が生まれたと考える。万葉集には二格を伴わない「トリ佩く」「トリ懸く」も見られるが、これらも同様に「トリ持つ」からの類推で作られたものであろう。ただし、トリのつかない「佩く」「懸く」と意味用法の顕著な違いがないことから、これらは語彙化して独特の意味を有するには至っておらず、あくまで神事や祈祷を中心とした和歌表現のために使用されたトリーに過ぎないと思われる。

このように、「～ヲ～ニトリー」構文のトリーは「接頭辞トリ+後項」という構造と考えられる。しかし和歌表現上で創出されたトリーであるため、「トリ負ふ」「トリ向く」のように中古以降姿を消すものや、「トリ垂づ」のように中古にも和歌の1例しか見られないものが含まれる。韻文にはこのような一語化はしているが語彙化はしていないトリーが頻繁に使用され、上代はテキストの性質上そのようなトリーが多く見られるのではないだろうか。その一方、実質的な言語生活ではより多くのトリーが用いられていたとしても、韻文にはそれが反映されていなかった可能性が高い。このように考えれば、中古において上代に確認できないトリーが高い定着度を示したことも説明できる。中古に出現するトリーには、実際には上代から存在したが韻文には残らなかったものが少なからず含まれると推測される。

なお、韻文において中古よりも上代にトリーが多く見られるのは、万葉集と八代集の歌集としての性格の差異による。雑多な歌を収録した万葉集の歌には、勅撰集たる八代集に比べ、日常語が比較的入り込みやすかったと考えられる。

4. まとめ

中古において、複合動詞トリーが発展していたことは事実として認められる。しかし、中古におけるトリーの用例の多さと定着度の高さは、上代から中古にかけての接頭辞トリによる造語の発達だけでは説明がつかない。上代には、テキストの性格上、中古和文に比べてトリーが現れにくかったものと思われる。上代にも見かけ以上にトリーは発達しており、中古にいたってそれが文献に多く出現したと捉える

⁹ 石井(2007)は、動詞が接頭辞となるプロセスを「過程結果構造」の複合動詞前項の形式化として説明した。過程結果構造は「複合動詞の表すひとまとまりの運動を二つの局面に分割し、時間的に先行する〔過程〕の局面を前項が、それに後続する〔結果〕の局面を後項が表す構造」(p.108)である。

方が適切であろう。上代から中古にかけてのトリーの発展は、数字上に表れているほど顕著なものではなかったと考えられる。

5. 今後の課題

古代語のトリーには、なお検討すべき問題が多い。その 1 例として、次のようなトリーの扱いは慎重になる必要がある。

(15) 墨染ならぬ御火桶、奥なるトリ出でて、

(源氏物語・椎本)

「トリ出づ」は他動詞＋自動詞であり、「奥の方の火桶をトリ、(その火桶が)出る」という非一体化動詞接続と見るのが一般的である。百留(2003)はこのような「主語の義務的同定」(由本 1996)に違反する「異主語動詞接続」の存在から、古代語における複合動詞の存在を否定する。しかし、「トリ出づ」は多くの作品で使用されるため、少なくとも「表現」として定着していたことは疑いない。かような例をどのように扱うかは、今後検討する必要がある。

また、前項後項間への係助詞の介入など、古代語の動詞においては前項と後項の形態的緊密性の低さが論じられることも少なくない。古代語において緊密度の低い動詞接続が存在したことは事実であろうが、例えば「トリ持つ」のように緊密度の低さを伺わせる例が見当たらないものもある。多くの具体例を見ながら検討していく必要がある。

中古にはウチ、カキ、サシなど、接頭辞とされる動詞連用形が多い。これらとトリーの関係についても、今後考察していきたい。

《テキスト》

鶴久・森山隆編『萬葉集』おうふう／日本古典文学大系『古代歌謡集』岩波書店／新日本古典文学大系『古今和歌集』『千載和歌集』『枕草子』『源氏物語』『今昔物語集』『夜の寝覚』／高知大学人文学部国語史研究会編『栄花物語 本文と索引』武蔵野書院／宇津保物語研究会編『宇津保物語 本文と索引』笠間書院

《参考文献》

青木博史(2012)「レキシコンと言語変化：歴史的観点から見た複合動詞」第 37 回関西言語学会シンポジウム「日本語レキシコン研究の最前線」発表資料／石井正彦(2007)『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房／関一雄(1993)『平安時代和文語の研究』笠間書院／百留康晴(2003)「複合動詞と動詞接続 — 「～出づ」を中心に —」『国語と国文学』80(8)／由本陽子(1996)「語形成と語彙概念構造—日本語の『動詞＋動詞』の複合語形成について」『言語と文化の諸相—奥田博之教授退官記念論文集—』英宝社／阿部裕(2011)「上代日本語の動詞接続「トリー」について — 複合動詞の存否を中心に —」『Nagoya Linguistics(名古屋言語研究)』5